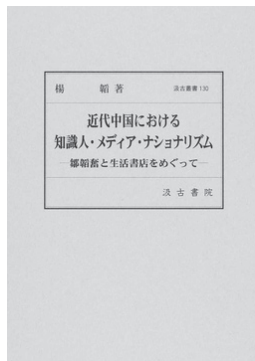


楊韜著

近代中国における 知識人・メディア・ナショナリズム ——鄒韜奮と生活書店をめぐる

汲古書院／2015年11月／344頁／9000円＋税



菊地俊介

本書は、鄒韜奮と生活書店という、近代中国メディア史研究の中でも個別具体的な対象を取り上げて考察した実証的研究である。課題は、本書前書きにあるように、「近代中国における知識人・メディア・ナショナリズムの三者の相互関係」を明らかにすることである。筆者は、鄒韜奮と生活書店が中国近代史上に大きな影響力を及ぼした存在であるにもかかわらず、総合的な研究が従来なされてこなかったと指摘し、本書を中国近代史研究の空白を埋めるものと位置づけている。生活書店の重要性として、筆者は雑誌『生活』の発行部数が民国時期において最も多く、広範な読者を獲得していたことと、更に読者投書欄を設けてその幅広い読者同士が討論を行う言論空間を形成したことを挙げている。「近代中国における言論的公共性の考察に欠かせない存在」なのである。

鄒韜奮（一八九五—一九四四）は近代中国のジャーナリストで、救国会の活動家としても著名である。一九三六年に国民党に反対した知識人を弾圧した「抗日

七君子事件」で逮捕された一人としても知られる。ジャーナリストとしては、中華職業教育社の機関誌『生活』の主編を務め、一九三二年に独立して生活書店を創設した。その後引き続き生活書店から『生活』ほか各種雑誌を発行し、これらを通して言論による抗日運動を展開した。なお生活書店は、現在の生活・読書・新知三聯書店の前身にあたる。

「前書き」では、「知識人・メディア・ナショナリズム」について概括し、それに続く本論は四部構成である。

第一部は「導入篇」で、序章と第一章で構成されている。

序章「生活書店及び鄒韜奮研究」では、鄒韜奮研究に関わる一次資料についての概説と、先行研究の検討を行い、その上で本書の研究視座について述べている。まず、一次資料としては、鄒韜奮が執筆した記事、論文、翻訳作品などを収録した『鄒奮文集』や『鄒奮全集』を紹介している。先行研究の問題点は、ひとつは一九三〇年代の研究が中心で一九四〇

年代に考察が及んでいないことにあると指摘している。そして、生活書店の組織構造や、国民党や共産党、第三勢力との関係については明らかにされていないという。また、従来のように言説分析だけでは組織的、社会的背景を考察できないと指摘する。これらの課題を踏まえて、本書の視座としては、鄒韜奮だけではなく彼を取り巻く人物にも焦点を当てること、生活書店の経営方式に注目すること、史料については生活書店関係者の手によるものだけではなく、『中央日報』や国民党の内部資料を重視することを挙げている。

第一章「近代中国（上海）のジャーナリズム環境」では、上海とメディアの関係について概説し、特に外国の影響や外国語メディアについて論じている。

第二部は「人物篇」生活書店の知識人たち」で、第二章から第四章までを含む。第二章「ジャーナリスト鄒韜奮の発展」は、鄒韜奮の生涯を辿りながらジャーナリストとしての思想の形成過程を考察している。鄒韜奮は、一九三三年から一

九三四年にかけて西洋思想を系統的に研究し、世界の動向を見つつ中国の将来について、メディアを通して問題提起をしてきたという。加えて、筆者は鄒韜奮が特にアメリカの教育学者であるジョン・デューイの影響を大きく受けたことに焦点を当て、本書の独自の視点として打ち出している。デューイは中国の教育近代化に大きな影響を及ぼした人物であり、胡適や陶行知といった中国の教育近代化に寄与した人物を育てたことでも知られる。筆者は、従来の研究では着目されていなかった鄒韜奮の翻訳家としての業績を強調し、鄒韜奮がデューイの『民主主義と教育』を翻訳していることに着目している。鄒韜奮はデューイの影響を受けて平民教育の重要性を認識し、民主思想を宣伝し、鄒韜奮のジャーナリストとしての仕事には一貫してデューイの思想が根底にあったことが見て取れるという。これは、本書の第四部で中心的に検討される読者投稿欄を通して大衆と対話をするという雑誌編集の方式にもつながるものだという。以上を踏まえ、筆者は鄒韜

奮を大衆教育に尽力し、大衆と共にあるとした愛国的民主主義ジャーナリストであつたと評価している。

第三章「戦時期における鄒韜奮の政治活動」では、鄒韜奮の国民党や共産党に対する認識に焦点を当てている。鄒韜奮は、一九三八年から一九四一年まで国民政府によつて招聘され、国民参政会に参加した。そして、一九四四年に死去する直前に共産党に入党したとされている。

本章では、この間の鄒韜奮の思想的変遷について考察している。鄒韜奮は、国民党に失望しつつ、そして共産党に関心をもちつつも、共産党の武力闘争による階級解放には反対だったという。筆者によれば、鄒韜奮は言論人として無党無派でなければならぬと考えていたのであり、共産党入党の理由は、国民党による生活書店弾圧と、共産党による生活書店に対する地下工作、加えて周恩来との関係にあったという。

第四章「生活書店の人々・黄炎培・杜重遠・胡愈之・徐伯昕を中心に」では、表題にある四人の人物をそれぞれ取り上

げ、鄒韜奮や生活書店との関わりについて復元している。彼らがそれぞれの能力を発揮して生活書店の設立と発展に貢献したと述べる。

第三部は「書店篇…近代出版メディアの一つのあり方」で、第五章と第六章を含む。

第五章「生活書店の募金活動」は、東北義勇軍支援のために一九三一年から一九三二年まで行われた募金活動を具体的な事例として取り上げ、言説分析のみならず、社会活動の側面から生活書店のあり方を考察するものである。筆者は、生活書店の「合作者性質」を指摘する。メディア機関としては異例の大規模な募金活動を可能にした要因は、かつて地方では入手しにくい出版物を代わりに購入して郵送する「代辦」サービスを行っていたノウハウを持つ、経営上の特質であるという。しかし、献金する側の目的や、支援金が集められたルートなどについては明らかにされず、今後の課題とされている。

第六章「戦時下の経営管理」は、戦時

下の物資不足、物価上昇、空襲などの困難な状況でいかに努力して生活書店の経営が維持されたかを復元したものである。生活書店の経営管理に関する先行研究は、多くが一九三七年の上海事変までにとどまっており、本章はその研究史の空白を埋める意義を持つ。

第四部は「言説篇…メディアとナショナリズムの交錯」で、第七章から終章までを収めている。

第七章「メディア化された共同体…生活書店出版物の投書欄」では、いよいよ筆者が最も注目する投書欄の考察に入る。ここでは、『生活』『新生』『生活星期刊』『抗戦』『大衆生活』と、発行時期を異にする五誌の投書欄が考察対象とされ、更に『韜奮全集』も用いて、投書欄について考察している。筆者は、投書欄を読者、投稿者、編集者の三者によるコミュニケーションが行われ、相互作用を生み出す「誌上コミュニケーション」と捉え、どのような内容の投書があるか、なぜそれらの投書が関心を集めたのかに着目し、ナショナリズムの形成と結びつけて

考察している。特に筆者は、読者が知識人に限らず大衆であることの意義を強調する。また、郷韜奮が投書欄では問題解決のために読者同士のコミュニケーションを呼びかけ、大衆が能動的に言論空間における共同体を構築することを促し、更には文字が読めない人への口伝えも促していたという。こうした投書欄を通して一般読者の認識の復元は、本書の最も独創性のある成果だと言えよう。

筆者は、投書欄に投稿された内容を分類し、その傾向の変遷を辿っている。ここから、『生活』への投稿の「恋愛と貞操論争」への関心の高さを見出し、これに関する投書を次章で具体的な考察対象とする。そして、『生活』廃刊に続いて発行された『新生』『生活星期刊』の投書欄では、「恋愛と貞操論争」ではなく、社会問題や抗日救国へと中心的なテーマが移っていく過程を復元する。そして『抗戦』では、青年の徴兵や壮丁問題の議論が増えてくるという。投書欄では、これらの読者の声に対して編集者が答えていく形をとる。この変遷を辿った

上で、筆者はなぜこうしたトピックが人々の関心の対象となったのかへと考察を進める。

これについて、日中戦争へと時代が向かう中、個人的で日常生活的話題から戦争をめぐる議論へと転換するのに伴い、読者層も拡大したという。そして抗日の投書が増えたのは、大衆のメディアへの言論表現意欲の表れだと見ている。

投書の掲載は編者によって選択されるものであるため、投書に反映されているのは投稿者の声というよりは、それを選別する編集者の意図であるという史料批判が必要であろう。筆者はこの点についても十分に留意し、郷韜奮自身の言説から見て、投書掲載の基準は敢えて設けないようにされていたと判断している。

第八章「事例分析…投書欄における『恋愛と貞操』をめぐる論争」では、中国の近代化と密接な関係にある恋愛と貞操をめぐる投書に焦点を当てた考察を行う。これを通して、論争が知識人から一般読者へと広がったことを指摘する。そして、なぜ抗日へ世論が向かう時期に恋

愛と貞操が論争されたのかと問題を提起する。

近代中国におけるセクシュアリティ言説に関する研究は従来もあるが、投書欄言説という視点からの検証はなされてこなかったという。本章では『生活』の投書欄を用いて、一九一〇年代、一九二〇年代の知識人の言説と、一九三〇年代の『生活』の言説を分析し、その比較を行い、郷韜奮の役割を考察する。

『生活』投書欄では様々な議論がなされていたが、郷韜奮は恋愛と貞操の問題を民族社会意識に関わる重要な問題だと主張していた。現時点では貞操は打破すべき束縛だというのが、郷韜奮の結論であった。

筆者の考察によれば、『生活』の投書欄における議論が、恋愛と貞操論争を大衆へと広げたという。また、一九一〇年代以来の論争の変化について、イデオロギー論争、婚姻制度に関する議論から、性行為や生殖に争点が推移したという。これを筆者は、大衆の参加によって争点が多様化したものと見ている。また、投

書の掲載は編者の取捨選択を経たものであることには本章でも留意されており、これについては、鄒韜奮自身が特定の投書を特別扱いしていないことを強調しており、鄒韜奮は自らの意見を提示することなく、議論の調整役に徹していたと筆者は見ると。

だが、恋愛と貞操論争は、救国や抗日に関する議論に取って代わられることになる。筆者はこれについて、鄒韜奮が恋愛と貞操問題を重視したことは無力であったという。なぜ抗日に世論が移りつつある時期に恋愛と貞操問題が起きたのか、鄒韜奮が民族社会意識を高める方法として捉えた真意は、更に追究する必要があるとして結論を保留している。

第九章「新生事件から見る日中メディア間の対抗」では、言論弾圧事件である新生事件を取り上げ、これを日中両国のメディアにおける言論政策に変化をもたらした、国民全体の世論形成に影響を及ぼした事件と位置づけ、その背景を考察する。

本章では、新生事件に関わった杜重遠

の略歴を述べた後、鄒韜奮との関わりについて考察を進める。廃刊に追い込まれた『生活』を引き継ぐ形で、杜重遠が『新生』を発刊した。しかし、『新生』に掲載された記事の内容が日本の天皇に対する不敬であるとして、『新生』も日本側からの圧力によって廃刊されることとなった。これが新生事件である。筆者は、日中双方でのその後の経過について論じている。『東京朝日新聞』と『申報』での報道を比較し、前者では中国政

府と上海市が日本政府の抗議と要求を全面的に飲み込んだという一面に報道が「偏向」していたのに対し、後者は不敬の理由の追究と中国国内の批判の動きを報道したという。筆者は、従来の研究では新生事件をめぐる日中メディア比較はなされていないとしてその意義を打ち出し、日中両紙の「偏向」の背景を考察する。筆者はその背景として、まず中国侵略に伴うナショナリズムの高揚を挙げている。また、日本側については天皇機関説との関連を論じる。本章は、メディア史上の事件を取り上げ、その後のメディア

の変質を復元し、日本との比較を通して、中国メディアに現れたナショナリズムの高揚の実態をより明確に描き出そうとするものである。

第十章「国貨」をめぐる言説の浸透性検証」では、『生活』で国貨がどのように語られてきたか、そして読者がそれにどのように反応したかを考察するものである。これを通して、筆者はメディアとナショナリズムの関係を読み解いていく。従来の歴史研究では不十分であった、メディア読者の反応を読み取ること力点を置き、『生活』を史料として用いる。

筆者の分析によれば、『生活』では一九三一年から「国貨」に関する記事が飛躍的に増加し、そして一九三二年に再び減少するという。なお、その背景は満洲事変であろうと論じている。

『生活』は、「国貨」を愛すること、造ることを提唱する。だが筆者は『生活』に掲載された広告に着目し、広告に洋装が描かれていることから、西洋のライフスタイルに対する中国人の憧れが見て取

れるという。

次に、筆者はこうした「国貨」言説に對して読者がどのように反応したかを考察する。筆者によると、「国貨」に関してナショナリズムを背景とした投稿が見られると述べつつも、その数は少ないという。そこに、上海という国際都市の住民の「国貨」に対する不信任と「洋貨」に対する好みが強かったことを指摘する。同時に、「国貨」という枠組みの曖昧さも指摘する。本章の考察を通して、筆者は先行研究では「国貨」をめぐる言説が社会に浸透していた度合いを大きく見積もっているが、読者投稿から見れば、「国貨」への関心は先行研究で論じられているほど社会に浸透していなかったと、新たな見解を打ち出している。意図的に織り込まれた愛国心の言説に、大衆は必ずしも共鳴しなかったということである。つまり、メディアの送り手の情報量と受け手の反応の不均衡ということであり、この結果はナショナリズムの多様性と複雑性を示すものであると筆者はいう。

終章「生活書店から三聯書店、そして再び生活書店へ」では、本書の考察の総括に加えて、考察対象とした一九四〇年代以降の生活書店の歩みについて述べる。

巻末には付録として史料抄録、関連略年表も収めている。なお各章の末尾にもそれぞれの考察に関わる引用史料や筆者が独自にまとめたデータを掲載しており、入念な実証的考察がなされた跡が窺えると同時に、資料集としての価値も大きいと言えよう。

本書が冒頭に掲げた課題は、「近代中国における知識人・メディア・ナショナリズムの三者の相互関係」を明らかにすることであった。この三者の相互関係が最もよく描き出されているのは、やはり第四部の投書欄を考察した部分であろう。投書欄が、メディアの送り手だけではなく、受け手である大衆からの反応、また受け手である大衆同士の議論の場を形成したものであり、重要な意義を持つものであることは筆者が既に述べている通りである。投書欄からは、それを編集す

るメディアの主体である「知識人」の認識と、メディアの受け手である大衆の反応や議論を見ることができ、それを「メディア」という機能が媒介し、近代中国における「ナショナリズム」がどのように形成されたか、実態がいかなるものであったかを考察することができる。第十章の「国貨」をめぐる議論の考察は、メディアの送り手である知識人と、受け手である大衆の意識の差異を明らかにしたものである。その意識とは、ここではナショナリズムのことである。

一方、第七章、第八章で論じられているように、メディアは大衆を議論に積極的に参加させ、大衆の意識を変える作用を及ぼした。そうしたメディアのあり方を生み出した鄭韜奮と生活書店は、近代中国メディア史研究において特に重要な役割を果たしており、本書はこうした注目すべき存在に光を当てた意義があると言える。そして、第二部と第三部は、こうしたメディア及びそれに関わる人物の事跡を明らかにしたという意義を持つ。では、評者が本書及び関連資料を参照

して考えたところを、いくらか述べることにする。

評者も、『生活』『新生』『生活星期刊』『抗戦』『大衆生活』を少しばかりではあるが参照してみた。まず気になったのが、『新生』の読者投書欄「新生之友」であり、筆者も既に言及しているように、『新生』に掲載された投書の少なさである。『生活』及び『生活星期刊』は読者の投書をほぼ毎回掲載しているにもかかわらず、『新生』はこれらに比べて大幅に読者の投書掲載を減らしている。

この原因には、筆者も指摘する通り、『生活』及び『生活星期刊』の主編が鄒韜奮であったのに対し、『新生』の主編が杜重遠に代わっていたこととの関連が考えられよう。この時点では、読者の投書欄を重視したのは鄒韜奮の独自のアイデアであった、これは言い換えれば読者の投書欄を重視するというアイデアは、編者が交代すれば継承されない程度のインパクトしか持っていなかったというようにも考えられないだろうか。近代中国のメディア史における鄒韜奮の重要性と

同時に、彼のある種の特殊性についても考える必要があるのかも知れない。また、『抗戦』『大衆生活』も鄒韜奮が主編を務めているが、読者投書欄は『生活』や『生活星期刊』よりも少ない。筆者は第七章で投書内容の傾向の変遷について述べているが、そもそも雑誌のテーマ自体が変化しており、鄒韜奮自身が編集のスタイルを変えているようにも読み取れる。そして拾われる大衆の声もその制約を受けたとは考えられないだろうか。

また、『新生』の読者投稿欄の内容についても、特に後半を見ると、哲学に関する内容など、大衆の生活に関わるものというよりは知識人の学問的な追究と思われるものが目立つ。『新生』が大衆を巻き込む言論空間として機能していたのかは、更なる検討の余地があるのではないか。

このほか、第十章の「国貨」をめぐる議論は、メディアが刺激するナショナリズムに対して大衆が必ずしも反応しなかったという実態を復元している。しかし、ここに鄒韜奮らメディアに携わった

人物については取り上げられず、メディア上の表象と言説にのみ依拠して考察を進めているため、「メディア」「ナショナリズム」に「知識人」を加えた三者の関連は捉えにくいのではないか。

これは第九章も同じで、メディアの報道内容に焦点が当てられているが、一方で知識人ら、即ち鄒韜奮らはこの事件とどのように向き合ったのであろうか。杜重遠はなぜこのような記事を掲載したのであろうか。本章もメディア言説の考察を進め、メディアのあり方の変容を復元しているが、この事件及び一連の経過と知識人の関係についても更に探究される必要があるのではないか。筆者は、事件後、なぜメディア報道が「偏向」するのかわという問いを立てているが、メディアを担うのが生身の人間である以上、鄒韜奮や杜重遠が事件とどのように向き合ったかということこそ、検討する価値のある課題ではないだろうか。本書で取り上げた生活書店発行の雑誌や後の文集などでも、この時代に著した彼らの言説はあるので、そこから何か見出すことはでき

ないものであろうか。

更に、第八章で取り上げられた「恋愛と貞操」の議論については、鄒韜奮がこれを民族社会意識に関わる重要な問題だと捉えた理由には、伝統社会の束縛から大衆を解放することが、近代国家を支える良質の国民の育成につながるのと考えるが、あったのではないだろうか。『生活』などには、体育や健康に関する記事や写真も目立つ。上記五誌にも彼自身の執筆した言説が見られるので、そこから彼が目指した国家や社会のあり方を復元することは可能ではないだろうか。同じく第八章で、鄒韜奮は投書欄では議論に参加せず調整役に徹したと述べているが、投書欄外で鄒韜奮が執筆した論説が数多くあり、そこから鄒韜奮自身の考え方がどのように発信されていたかを復元する必要もあるのではないだろうか。

あと、序章では本書で用いる資料について、生活書店の外側からの視点を取り入れるため『中央日報』を重視すると書かれているが、本論では『中央日報』が全く取り上げられていないのが疑問で

あった。

最後に、終章で筆者は「知識人」という「軸」では鄒韜奮らを通して当時の知識人の姿を復元したとし、これらを総じて「近代中国の知識人の生態の縮図」と述べている。次に「メディア」という「軸」では、生活書店に焦点を当て、「近代中国の出版メディアの一モデル」と見なせるといふ。そして「ナショナリズム」という「軸」では、言説分析を行い、当時のナショナリズムの実態、多様性や複雑性を明らかにしたという。このうち「ナショナリズム」の複雑性は本書に述べられている通りであるが、「知識人」と「メディア」をめぐる、鄒韜奮及び生活書店とは、近代中国において特殊性を帯びた存在なのか、それとも典型的な存在なのかは、更に検討の余地があるように思えた。

以上、評者なりに本書の課題である「知識人・メディア・ナショナリズム」に沿って考えるところを述べてきた。評者の理解が不十分な点も否めないと思われるが、いずれにせよ、本書の多角的な

アプローチと「人」に迫る実証的考察に学ぶところは多いと考える。